

## 『アナ・クリスティ』：アナと20世紀初頭のアメリカ

小 玉 容 子  
(英文教室)

### *Anna Christie* : Anna and America at the Beginning of the 20th Century

Yoko KODAMA

キーワード：new woman, the early 1900s

#### I. 序

*Anna Christie*は1921年11月に初演を迎えた。そしてEugene O'Neill (1888-1953)は前作の*Beyond the Horizon* (1920)に続いてこの作品でもPulitzer Prizeを受賞した。しかし、O'Neillはこの*Anna Christie*を作品としてはまだまだ手入れが必要だと考えていた。そして後に自分の代表作の中に入れることを拒否した。O'NeillはTheater GuildのプロデューサーLawrence Langnerへの1941年8月24日付けの手紙で次のように言っている：“The fact is ‘Anna Christie’ is the stalest of all my plays -- stale from much use, and stale because it is the most conventional playwrighting of anything I’ve done... I did not include it when picking representative plays for my Nine plays book, despite its success ...”<sup>(1)</sup> O'Neillはこの作品を旧来の型にはまったものだと評価していた。しかしO'Neillはまた同じ手紙で、*Anna Christie*の扱っている題材は1921年の演劇界では類をみない新しいものだったが、とも言っている。

初演当時、ハッピーエンドの結末がありきたりで、この作品の弱さとなっている、という批評があった。問題の結末とは、売春婦だったAnnaが蒸気船の火

夫であるMat Burkeと結ばれるというものである。*Anna Christie*の脚本を上演の準備段階で読んだ劇評家George Jean Nathanから、結末が陳腐なハッピーエンドで、観客に対する裏切りだとのコメントが送られてきた時、Nathanに宛てた1921年2月1日付けの返事で、O'Neillは次のように説明している。

From the middle of that third act I feel the play ought to be dominated by the woman’s psychology... Anna forced herself on me, middle of third act, at her most theatric. In real life I felt she would unconsciously be compelled, through sheer inarticulateness, to the usual “big scene,” and wait hopefully for her happy ending. And as she is the only one who knows exactly what she wants, she would get it.

And the sea outside -- life -- waits. The happy ending is merely the comma at the end of a gaudy introductory clause, with the body of the sentence still unwritten. (In fact, I once thought of calling the play “Comma.”) ... My ending seems to have a false definiteness

about it that is misleading -- a happy-ever-after which I did not intend.<sup>(2)</sup>

O'Neillはありきたりの昔話のように、「みんな幸せに暮らしました、めでたしめでたし」という結末を意図していなかった。このことは、登場人物それぞれの最後の台詞を注意して聞けばわかるだろう、観客が登場人物三人三様の反応に目と耳を傾けないのは残念だ、とO'Neillは言っている<sup>(3)</sup>。

*Anna Christie*は1919年春に書かれた*Chris Christophersen*<sup>(4)</sup>を書き直した作品である。中心となる人物が父親のChris Christophersenから娘のAnnaに移ったことは、題名の変更からも推測されうる。O'NeillはChrisの人物描写だけを前作から維持している。Chrisは長年船乗りをしていて、今は石炭を運ぶ荷船の船長で、船で生活をしている。彼の親兄弟、そして息子たちも船乗りであったが、皆海で命を落としてしまっている。船乗りの習いで、Chrisは長年家族と、といっても妻はすでに亡く娘のAnnaがいるのみであるが、会っていない。彼が今の状況にいるのは、全部、海——悪魔のような海のせいだと海を恨んでいる。海は彼を海に止まらせ、離さないのである。O'Neillは“The chief value I set on it [*Anna Christie*] is the character of old Chris.”とさえ言っている。Chrisの人物描写の中で、彼の体の中に流れる船乗りの血、そして家族を奪った悪魔のような海への恨み、海から逃れられない運命、といったものをO'Neillは*Chris*から一貫して描いているのである。では、何故娘のAnnaが中心人物となったのだろうか。先の(2)の引用でO'Neillが「圧倒的になってきた女性心理」「私(作者)にかけられたAnnaの力」と言及しているものの正体は何なのか。本稿では、作品の背景となっている1910年、および初演の1921年当時の社会背景の中で、中心人物となりうるほどの力を持つ存在になったAnnaの姿を明らかにしていきたい。そして結末の持つ意味を再考していく。

## Ⅱ. 時代背景

1910年から1920年というのは、どのような時代だったのだろうか。第一次世界大戦が起こり、ロシア革命が起こり、大戦が終わり、国際連盟が成立した。アメリカ国内では、民主党のWoodrow Wilson (1856—1924) が第28代大統領になり、中立を宣言

していた大戦に参戦し、アメリカ共産党が成立した。また禁酒法や婦人参政権に関する憲法修正案が発効した。

少し時代を遡るが、1881年から1905年に行われた、労働争議に関する詳しい調査によると、1899年から争議件数・争議参加者とも急激に増加に転じたことが明らかである。ストライキの件数をみると、1897年1110件、1898年1098件、1899年1838件、1900年1839件、1901年3012件と増加している。1905年にはIWW (Industrial Workers of the World=世界産業労働者組合) が結成され、産業別組合主義による一大組合 (One Big Union) に全労働者を統合することを目指した。具体的な運動の例としては、1912年マサチューセッツ州ローレンスの羊毛工場労働者の巨大なストライキが挙げられる。このストライキは「小型社会革命」と形容され世論の支持を受け、IWWが巨大資本に勝った例である<sup>(6)</sup>。

20世紀に入ると企業の規模が大きくなり、資本の力がますます巨大なものになっていった。基幹産業の鉄鋼産業が「無組合時代」に入っていき、労使関係も変化し始めた。しかし一方では、先にも述べたIWWのように熟練工から未熟練工そして黒人や女性までもその組合員とした大組織が作られ、20世紀初頭の20年間は労使対決が本格的な組織的対決となった時代でもあった。社会ではこのように、巨大資本が労働者を搾取する力を強める一方で、その凶式を崩そうとする力も大きくなっていった。*Anna Christie*第一幕で、幕があがると間もなく二人の港湾労働者がこれみよがしに労働組合のバッジをつけて、舞台となっているニューヨークの港近くの酒場にやってくる。この冒頭の部分は、O'Neillが1910年にこの作品の時代を設定しており、労働運動をその時代の一つの大きな動きとして意識していたことを表している。1901年にはアメリカ社会党が結成され、社会主義運動が再組織された。そして労働者の抵抗は新しい次元に入ったといわれる。ちなみに、社会党の大統領候補Eugene Victor Debs (1855—1926、労働運動の指導者であり、かつアメリカ社会党の創設にも加わった) の得票数は、1900年9万5千票、1904年40万票、1912年には90万票と増えていった<sup>(7)</sup>。

1911年、産児制限を広める運動で有名なMargaret Sanger (1883—1966) は郊外での生活に終止符を打ち、夫婦でマンハッタンのアパートに移

り住んだ。彼女は自伝で、当時のアメリカは、政治、生活、道徳、芸術等あらゆる分野でラディカリズムが沸騰して、「最も面白い時期」に突入していたのである、と言っている<sup>(8)</sup>。ニューヨーク市には、グリニチ・ヴィレッジを中心に若い作家、芸術家、ジャーナリストらが集まった。そこでは青年文学者と社会的急進派の世界とが交錯していたといわれる<sup>(9)</sup>。この時期、1917年のロシア革命についての最高のルポルタージュとみなされる『世界を揺るがした十日間』(Ten Days That Shook the World, 1919)を書いたジャーナリスト、John Reed (1887-1920)との交友関係もあったO'Neillである<sup>(10)</sup>。

1917-1918年の冬、後にJohn Reedと同じように共産黨員になる急進的な友人Michael Goldと「芸術と政治」についての意見の食い違いがあったという。GoldはO'Neillに“class struggle”を劇化してみないかという話をした。その時O'Neillは“Art and politics don't mix.” “When a playwright starts writing propaganda he ceases to be an artist and becomes, instead, a politician.”<sup>(11)</sup>と答えている。1918年の夏に、O'NeillはChris Christophersenのノート作りをしていた。この頃に、「階級闘争」を題材にした劇づくりをする意図は持たなかったにせよ、社会の不平等、持つものと持たざるものの関係、ひいては搾取する者とされる者の関係は、O'Neillも強く意識していただろうと思われる。また同じ頃、女性の生き方も幅が広がってきた。この時代の若者は男も女も、ピューリタンのモラルからの解放、ヴィクトリア朝時代の生き方からの解放を求めている。女性の新しい生き方という視点から、また、組合運動とは主旨を異にするが、支配する者とされる者という視点から、次にAnnaをみていこう。

### Ⅲ. Annaの過去と彼女の生きた社会

Chris ChristophersenのAnnaはスウェーデンで生まれ、イギリスで育った“a prim tea drinker” “a respectable typist”である。言葉は標準英語を用い、父親の英語をなおしてあげようとする20才のプロンドの娘で、彼女の使う悪い言葉といえば、せいぜい“By jimminy”<sup>(12)</sup>程度である。一方、Anna ChristieのAnnaは、“plainly showing all the outward evidences of belonging to the world's oldest profession”という様子で“Johnny-the-Priest's”の

酒場にやって来る。彼女の第一声はバーテンダーに向かったの、“Gimme a whisky--ginger ale on the side ... And don't be stingy, baby.”<sup>(13)</sup>である。禁酒法が成立したばかりの頃のアメリカで、劇場に足を運ぶ観客たちはこの台詞に失笑したかもしれないが、まず強い印象を与えただろうことは想像できる<sup>(14)</sup>。

Chris ChristophersenのAnnaはアメリカにいる父親の元にやってきた理由を次のように説明している。彼女はイギリスでタイピストとして働いていたが、会社のボスが突然Annaに対して言い寄ってきた。そのため会社を辞めるしかないと判断したのである。

There was only one thing to do--leave. Then it came to me that I might as well make an entire new start if I wanted to get on in the world. I dreamed of the big opportunities for a woman over here in America--and here I am... And I'm not going to stop as a typist, either. My big hope is to work and save until I have enough to take a course in college. You'd think to hear me I had some big life ambition. I haven't. .. I only know I want to get away from being just a woman, to lead a man's life; to know as much as I can, and see and live as much as I can--to always have something new to work for. I won't grow stale--and married. I won't.<sup>(15)</sup>

19世紀後半のヴィクトリア朝時代から、アメリカでは様々な形で女性の社会進出がはじまった。Annaはイギリスでタイピストとして勤めていたが、アメリカでも1900年以降“stenographers and typists”という職業が女性職として登場してくる<sup>(16)</sup>。1870年頃からタイプライターが徐々に会社の事務用に取り入れられていくのだが、第一次世界大戦以前のイギリスでは、労働者階級出身の女性事務員はほとんどいなかったという。戦後になってやっと、多くの労働者階級の少女、特に野心的な少女が、義務教育より1年多く学校にとどまったり、テクニカルスクールに通ったりして、事務職に参入していった<sup>(17)</sup>。このような状況を考えると、ChrisのAnnaは戦前から仕事をし自立をするという、新しい女性の生き方を実践してきたし、父親のいるアメリカにやって

きて、これからも結婚よりキャリアを目指そうとしていた女性である。人生に大きな目標があるわけではなかったが、“I want to get away from being just a woman.”と言い、伝統的な女性の生き方や結婚を否定していた。しかし、船乗りのAndersenと出会ってからは、イギリスでの仕事を、“It’s no very interesting, you know, doing the same thing over again day after day, cooped up in an office.”と言い、さらに“...I can’t feel guilty about not working and earning money, can I?”<sup>(18)</sup>とも言い、それまで表わしてきた考え方や生き方を否定してしまう。

1920年代初頭のアメリカで、ヴィクトリア朝時代の「お上品な伝統」を抜け出し、自立を目指そうとする女性を描くことは特に革新的なことではないだろう。ましてや結局、「女性の場所は家庭であり、そこにこそ女性の幸福がある」という中産階級の伝統的な家族観、女性観に戻ってしまう最初のAnnaは、それが運命に導かれた結末であろうと、個人の意志による選択であろうと、強い意志の持ち主としては描かれていない。

一方、*Anna Christie*のAnnaはChrisのAnnaと異なり、将来の予定、希望等持って父親の所にやってきたのではない。休息を求めてやってきたのである。彼女は、幼い頃から搾取の対象であった。Annaの母親は、待っても帰らない父親を母国のスウェーデンで待つのはやめ、アメリカ・ミネソタ州にすむ親戚の農場に娘とともに身を寄せた。その農場でAnnaは、親戚の者たちに牛や馬のように使われるのである。16才の時には親戚の息子の一人に犯され、逃げるように農場を出て行った。そして、街で子守りの仕事に就く。そこでの生活はまるで牢獄に入れられたようだったとAnnaは言う：“And you think that was a nice job for a girl, too, don’t you? [Sarcastically] With all them nice inland fellers yust looking for a chance to marry me, I s’pose. Marry me? What a chance! They wasn’t looking for marrying ... I was caged in, I tell you--yust like in yail--taking care of other people’s kids--listening to ’em bawling and crying day and night--when I wanted to be out--and I was lonesome--lonesome as hell!” (p.44) 男たちはAnnaの女としての性を求めているだけであった。安全で落ち着くことのできる場所を持たない者の孤

独を強く感じてきたAnnaは、2年間ほど子守りとして生活したが、そのあとは売春に身を堕とし、警察に捕まって、牢獄で病気になり、休息を求めて父親の所にやってきたのである。

現在でも同じことだろうが、教育を受けていない田舎育ちの若い女性が、都会に出てきて生計をたてる方法は多くはないだろう。1910年当時は、女中奉公<sup>(19)</sup>が女性の賃金労働の一位を占めていたが、奉公人がほとんどの場合一人しかいない状況での孤独、主人の「言いなりになる」という状況などは、女中奉公という仕事を含む大きな問題点であったと指摘されている<sup>(20)</sup>。その状況は、子守りという仕事でも同じであったと考えられる。閉じこめられ、孤独に耐えられなくなったAnnaは、言い寄る男達に身を任すようになるのである。Annaは、言い寄ってくる男達は結婚なんか望んではいなかった、と父親に訴える。男達は皆同じで、責任を伴う結婚と買春とを分けて行動しているのである。Annaはそんな男達を憎んでいる。

Annaが自分の過去をうち明けたあと、父親とBurkeは街へ行ってしまう。2日後に帰ってきたChrisはAnnaに、自分が親としての責任を果たさなかったせいで起こってしまった事柄に対して、いつかは許してくれるか、と問う。Annaは言う：“I’ll forgive you right now ... Don’t bawl about it. There ain’t nothing to forgive, anyway. It ain’t your fault, and it ain’t mine, and it ain’t his neither. We’re all poor nuts, and things happen, and we yust get mixed in wrong, that’s all.” (pp.49-50) O’Neillの描く売春婦達の多くの例に漏れず、Annaも置かれた環境ゆえに墮落していくのであり、決して自分から好んで墮落していくのではない。しかし、父親は悪魔のような海を責める：“You say right tang, Anna, py golly! It ain’t nobody’s fault! [Shaking his fist] It’s dat ole daval, sea!” (p.50) Chrisは繰り返し海を呪い海を責める。

O’Neillは売春婦たちを、“fascinating vampire”、すなわち心を奪う妖婦としてではなく、“children of fate”として理解して、彼女たちの魂の問題に関心を持ち続けたという<sup>(21)</sup>。運命に翻弄されてきたAnnaではあるが、しかしAnnaは、その運命と戦う強さを持っている。一方父親はBurkeに“You’ve swallowed the anchor”といわれる。*Chris*でAndersenは次のようにその言葉の意味をAnnaに説

明している：“To loose your grip, to whine and blame something outside of yourself for your misfortunes, to quit and refuse to fight back any more, to be afraid to take any more chances because you’re sure you’re no longer strong enough to make things come out right, to shrink from any more effort and be content to anchor fast in the thing you are.”<sup>(22)</sup> 自分で「悪魔のような海」がもたらしたものと闘おうとせずに、責任を自分以外のものに転嫁してしまい、努力もせず、現状にとどまるChrisは、父親としての強さ、父権を喪失した存在とも言える。弱気を攻められる父親、Annaが話しているとき口を挟むとしかられる父親、O’Neillはそんな父親像を作り上げる一方で、強い娘像を作っているのである。

劇の最後で、Annaは結婚し、家で夫の帰りを待つ妻になる予定である。「家庭内奴隷制」と定義されたり、経済面での援助を受けることになるという点では「保険契約ないしは身売り」と比較されたりすることのある結婚である。売春婦から妻への変化はどんな意味を持つのだろうか。世紀の転換点前後の結婚観と合わせて、当時の女性の生き方や立場をみることで、Annaがどのように受け止められうるのかを次にみていく。

#### IV. 女性の独立へ向けての動き

先に言及したように、20世紀初頭には、禁酒法や婦人参政権等が成立、発効した。それらが成立した背景とともに女性の置かれていた立場を明らかにしていくことで、女性の地位の向上や自由の獲得といった側面をみてみよう。

19世紀前半は、結婚によって男性は女性を所有するという考え方が一般的だった。父権制がしっかり作り上げられた状態における結婚は男性が女性を所有することであつたし、妻は「民事死」の対象となった。重罪犯同様、人間としてのあらゆる権利を喪失したのである。すなわち、妻は財産を管理する権利を失い、未成年者と同じ扱いを受け、かつ動産の地位に置かれ、夫は妻の法的飼主同然になったのである。<sup>(23)</sup> 19世紀後半になってやっと「既婚婦人財産法」の制定に向けての動きが始まった。このころから20世紀初頭にかけて、ヴィクトリア朝的価値観のもとに置かれた女性達だったが、様々な社会運動を通して、父権制に対し修正を加える方向に向か

った。しかし、父権制に終止符を打ち、男性優位主義のイデオロギーを撤廃し、地位 (status)、役割 (role)、気質 (temperament) にかかわる伝統的な社会化を撤廃し、従来性別によって隔離されてきた人間の経験の同化をもたらし、望ましい人間の姿は何かを改めて評価することは、なかなか難しいことだった。<sup>(24)</sup> 職業教育も受けていないAnnaにとっての自立の道は険しく、結局は妻の座へと移っていくことでしか、安全な場所は確保されない状況にあったとも言える。

性的な面をみると、ビクトリア時代はダブルスタンダードの時代であった。そして、この男女別々の二重基準に基づいた男性の買春を否定し、そして売春の非人間性に取り組んだ時代でもあった。南北戦争後、家庭の内外における道德規準を改善する動きがあり、その動きは二つの方向に進んだ。一つは節酒・禁酒運動であり、もう一つはSocial Purity = Sexual Purityの動きである。社会のモラルの改善を目指し、公にセクシュアリティをコントロールしようとしたのである。Social Purityのための運動の背後には、男性のセクシュアリティも女性のそれ同様にコントロール可能であるという前提のもとで、性行動における一律の基準をもうけること、そして、その基準に基づき、男性の性生活を含めた家庭内における特権を縮小し、女性が子供の数を少なくすることができるようにすること、等がその目的として存在していた。子供の数を縮小することは、女性の地位向上のためには必要なことであり、そのためには性生活のコントロールを女性がする必要があった。売買春を禁止することで、男性の性の対象は妻のみになり、それ故に夫をコントロールする力を持つようになる、という方向での運動は、女性にのみ「貞淑」を求めてきた社会の道德規準を変えていくものであり、女性の自由と自治のための運動の一部でもあった。<sup>(25)</sup>

#### V. Annaの自由と自治

家父長社会における父または夫の権力の揺らぎを導く動き、女性の自由と自治への動きは、Annaと父親Chris、恋人Burkeの関係にも見ることができる。AnnaはBurkeに、彼女も彼のことを愛しているが結婚はできない、と告げる。愛しているという告白が、自分への服従だと単純に受け止め、それなら自分の言うとおりに結婚すべきだ、と命令する

Burke。自分の言うことを聞いてAnnaは結婚しないと言っているんだと勝ち誇るChris。二人は力づくでAnnaに自分の言うことをきかせようとする。

BURKE : ... [He gets to his feet confidently, assuming a maserful tone] ... Well, then, I'll make up your mind for you bloody quick.[He takes her by the arms...]. Let you be going into your room now and be dressing in your best and we'll be going ashore.

CHRIS : [Aroused -- angrily] No, py God, she don't do that! [Takes hold of her arm]

ANNA : [Who has listened to BURKE in astonishment. She draws away from him, instinctively repelled by his tone, but not exactly sure if he is serious or not ...] Say where do you get that stuff?

BURKE : [Imperiously] Never mind, now! Let you go get dressed, I'm saying...

CHRIS : [To Anna -- also in an authoritative tone] You say right here, Anna, you hear!

.....

BURKE : ... She's taking my orders from this out, not yours.

ANNA : ...Orders is good!... [At the end of her patience...] You can go to hell, both of you! (p.42)

堪忍袋の緒が切れたAnnaは二人とも他の男達と全く同じで、自分を所有しようとしているだけだ、と言う。

ANNA : You was going on 's if one of you had got to own me. But nobody owns me, see? -- 'cepting myself.I'll do what I please and no man...can tell me what to do! I ain't asking either of you for a living. I can make it myself -- one way or other. I'm my own boss. So put that in your pipe and smoke it! You and your orders! (p.43)

Annaは決して男達に従順に従いはしない。彼女は本当の自分 (true self)<sup>(26)</sup>を維持し続けようとする。Annaはこれまでの生活の中で常に自由を奪わ

れてきた。彼女が最初に束縛からの自由を手に入れたのは、皮肉にも売春婦としての肉体的束縛との交換においてであった。そして次に船上で暮らして初めて知った心の安らぎと自由を、彼女は手放そうとはしない。心の安らぎ——海とともに、霧に包まれ、「お風呂に入ったあとみたいにきれいになった」自分を感じ、彼女の「属する場所」をやっと見つけたのである：“Funny! I do feel sort of --nutty, tonight. I feel old... like I'd been living a long, long time--out here in the fog... It's like I'd come home after a long visit away some place... why d'you s'pose I feel so -- so -- like I'd right place for me to fit in? ... And I feel clean, somehow -- like you feel yust after you've took a bath.” (pp21-22)そして彼女を愛してくれる船乗りBurkeへの彼女自身の愛情を自覚するAnnaである：“I been thinking and thinking -- I didn't want to, Mat, I'll own up to that -- I tried to cut it out -- but ... Sure I do! What's the use of kidding myself different? Sure I love you, Mat!” (p.39)自分の過去をうち明けたあと、彼女は希望を捨てきれず一旦は決めたニューヨーク行きを実行できないでいる：“Oh, Mat, won't you see that no matter what I was I ain't that any more?... I'd been waiting here all alone for two days ... thinking maybe you'd think over all I'd said--and maybe--oh, I don't know what I was hoping!...I gave up hope... But I got to thinking about you--and I couldn't take the train--I couldn't! So I come back here -- to wait some more. Oh, Mat can't you see I've changed? Can't you forgive what's dead and gone--and forget it?” (p.54)

Annaが海と一体感を感じ、自分の家にやっと戻ってきたと感じるのは、彼女の血に流れている「船乗りの血」故と受け止められる。Annaの海に対する思いは遺伝の要素を含むという意味においてこの作品はnaturalisticだが、結局Annaは逃げずにBurkeを待ち、BurkeはそんなAnnaを受け入れる。Annaは最終的に望むもの、愛する人と、これまで経験したことのない安らげる家と経済的な保証を手に入れる。自分の意志に従い、自分の望むものを手に入れたAnnaではあるが、彼女は、ここで自由—運命からの自由を手に入れたのだろうか。

O'Neillは*Anna Christie*の最終場面について次のようにいっている：I could have been done in ten different ways, any one of them superficially right. But looking deep into the hearts of my people, I saw it couldn't be done. It would not have been true. They were not that kind. They would act in just the silly, immature compromising way that I have made them act ... a bit tragically humorous in their vacillating weakness.<sup>(27)</sup> O'Neillは彼の人物たちが、早い時期に悲劇的結末を迎えることはない気づいていた。彼らは、その場その場で何とか、一番よいと思われる方法で対処していく。しかし彼らには、自分が向かっている方向はみえていないのである。Annaが手に入れた新しい環境も一時的なもので、悲劇的結末は先送りされただけだと、O'Neillは言っている。では、この悲劇的結末に向かうとはどのようなことを意味しているのだろうか。

## VI. 結末の意味するもの

AnnaはBurkeと結婚し、家で航海に出るBurkeとChrisを待つ生活を始めるだろうという結末は*Anna Christie*という作品を表面上は喜劇にしている。ここで、冒頭で述べたように、O'Neillが注目してほしかった中心人物三人の最後の言葉に耳を傾けてみよう。Chrisは自分とBurkeが同じ船に乗り長期の航海にでることになったことを、“It's funny. It's queer... it's dat funny vay ole devil sea do her vorst dirty tricks, yes.”と言う。このときはBurkeも同意して、大きなため息をつき、“I'm fearing maybe you have the right of it for once, divil take you.”と言う。それを聞いたAnnaは、“Cut out the gloom. We're all fixed now, ain't we, me and you?”と陽気に言う。この劇の最後の言葉はChrisの、“Fog, fog, fog, all bloody time. You can't see where you vas going, no. Only dat ole devil, sea -- she knows!” (p.60)である。観客にこのChrisの言葉はなかなか届かない。この点に関してSheafferは次のように述べている。

His [O'Neill's] mistake was that he wanted the audience to share Chris's apprehensions at the end; he tried, as Professor Travis Bogard puts it, “to force Chris's view of the sea as a

malevolent force ... onto the play as a whole.” But Anna is the playwright's chief spokesman here, especially in her mystical response to the sea; and, moreover, she is the most sympathetic character, so that we are led to identify with her, to hope with her that things will turn out well, despite Chris's ominous muttering about “dat ole devil,” the Sea.<sup>(28)</sup>

AnnaはどのようにしてO'Neillのスポークスマンになり、作者を動かす力を得ていくのだろうか。これはChrisやBurkeの人物描写、そして彼らの心の葛藤の描かれ方と関係している。

Chrisの青い眼は、単純な人のいい性格を表し、口元は子供っぽい我が儘さと気弱さを表している。(p.3) 娘が来ることになっても、彼の船に住んでいる情婦のMarthyに出て行ってほしいとはっきり言えないほど、気のいい、気の弱い男である。一方、Burkeは、長身で筋骨逞しく、強そうな外見はしているものの (p.23)、Annaに対して、自分の強さを自慢するところ等、子供っぽく単純でもある。特に最後の場面で、Annaにこれまでに愛した男は自分だけだということを誓わせる時など、「嘘を言ったら地獄の悪魔の所に魂は行くのだ、母からもらった十字架は偉大な力を持っているからこれに誓え、嘘を言ったら母が、天国の神様に頼んで君に呪いをかけてもらうぞ」等々延々とAnnaに伝える。このようにChrisもBurkeも単純な海の男として描かれているので、観客は彼らと自分達を同一視する機会は少ない。

男達の心の葛藤、運命との闘いは、唯一最終幕で描かれている。真実を知り、Chrisは自分のしたことの間違い、すなわち安全な陸地に娘をとどまらせておくという考えが間違いだったこと、娘をほっておいたために娘を不幸にしたことに気づき、娘の幸せのためなら船乗りといえどもBurkeと結婚してもいいのではないかとの結論に至る。そしてChrisは、自分が航海に出ることでAnnaに取り付こうとしている悪魔を連れ去るという。これはChrisが、自分の意志で海の悪魔と、そして運命と闘おうとする最初で最後の決断である。Burkeが言及した「飲み込んだ」を吐き出すのである。一方、Annaの心の葛藤は、Burkeを愛している自分に気づいたときから始まる。自分は彼の愛を受け入れるには相応し

くないという思いが、彼女をBurkeから遠ざけようとするのだが、その意図に反して、もう一つの思い、彼が自分の更生を信じてくれて許してくれるのではないか、という希望を捨てきれない。このような状況は、先に指摘したAnnaと海との一体感と共に、観客に強く訴える要素となっている。

結末でAnnaは、彼女が欲した状況を手に入れるが、彼女がこの先家庭に入り、男達が帰るのを待ち続ける女性に変わっていくと受け取るのは難しいだろう。Annaは最後の場面でも、Burkeのコップにビールを注ぎ、自分のコップにも注ぐ。そして「海のために乾杯！」と元気よくグイッとビールを飲み干す。それまで常に搾取の対象であり続けたAnnaであったが、そのような環境から何とか逃れようと抗ってきた彼女の勝利を表す場面であると同時に、彼女がChrisのAnnaのように貞淑な妻には変化しないだろうと予感させる場面でもある。主体としての自己を維持しつつ、自分にとって望ましい環境を得ようと戦う新しい女性の生き方と通じるこの力がAnnaの持つ力であり、O'Neillを第三幕で突き動かした力でもあったと考えられる。

BogardはO'Neill劇の海が持つ二重の意味を指摘している。その意味とは“double meaning of the sea-it's the place the soul is born and also it's the place the soul goes back at the time of physical death”である。海はAnnaにとって、救いの主、再生の力を与えるものなのか、それとも破壊の力だろうか。少なくともAnnaは生まれ変わった。Annaが経験した恍惚とした海との一体感、これは海にpossessされた瞬間であり、かつ生まれ変わりの瞬間でもある。“Is it witchcraft or is it blessing?”と問うBogardではあるが、O'Neillは海の間人を生まれ変わらせるパワーを信じたのだろうと結論している。<sup>(29)</sup>

先に、Anna Christieの結末は単なる「コンマ」である、というO'Neillのコメントを紹介した。O'Neillはまた言葉を変え、次のようにもいっている。

As a matter of fact there is no ending to “Anna Christie” at all, either happy or unhappy. The final curtain falls just as a new play is beginning. At least, that is what I meant by it. A naturalistic play is life. Life

doesn't end....One critic ... has said tragedy is not native to our soil ... If it were true, it would be the most damning commentary on our spiritual barrenness. Perhaps it was true a decade ago but America is now in the throes of a spiritual awakening... A soul is being born, and where a soul enters, tragedy enters with it.<sup>(30)</sup>

19世紀後半、富の追求、国力の増進を目指していたアメリカは、第1次世界大戦や社会主義革命、国内における女性達の運動などを通して、新しい世界、新しい価値観にふれた。知識の広がりや価値観の衝突は新しい自己の姿を意識させ認識させる。精神の目覚めを経験したアメリカの20世紀初頭、Annaの魂も生まれ変わりを経験した。Annaは海での生活で、これまでの自分とは異なる自分を意識し、自分の居場所を見出した。新たな自己認識—魂の目覚めを経験したAnnaそしてアメリカは、新しい環境の中で生き続ける。魂のあるところに悲劇がある、とO'Neillは言う。この悲劇は新たな自己と正面から向き合うことから始まると言えるだろう。

#### 注

- (1) Eugene O'Neill, *Selected Letters of Eugene O'Neill*, Ed. Travis Bogard and Jackson R. Bryer, (New Haven and London : Yale University Press, 1988), p.522. 手紙の中の“Nine Plays book”は、*Nine Plays by Eugene O'Neill* (New York : Liveright, 1932)である。
- (2) O'Neill, *Selected Letters*, p.148. Louis Sheaffer, *O'Neill: Son and Artist*, (New York : AMS Press, 1973), p.67.
- (3) Authur and Barbara Gelb, *O'Neill*, (New York : Harper & Row, 1962), p.481.
- (4) Eugene O'Neill, *Chris Christophersen*, (New York : Random House, 1982). “FOREWORD” by Leslie Eric Comens.
- (5) O'Neill, *Selected Letters*, p.522.
- (6) 鈴木圭介編『アメリカ経済史Ⅱ 1860年代—1920年代』東京大学出版会、1988年、pp.269—278. 野村達朗『新書アメリカ合衆国史 2 フロンティアと摩天楼』、講談社現代新書、1989年、pp.164—165.



- (7) 野村, pp.162-163.
- (8) 亀井俊介『ピューリタンの末裔たち—アメリカ文化と性—』研究社出版、1987年、p133.
- (9) 野村, p.160.
- (10) Gelb, pp.262-263, pp.442-443.
- (11) Gelb, p.359.
- (12) Eugene O'Neill, *Anna Christie*, (Mineola : Dover Publications, Inc., 1998, originally published in 1922), "Foreward" is added for this edition. "Foreward" で *Chris Christophersen* の Anna の上品さが言及されている。この "Foreward" は Travis Bogard の *Countour in Time : The Plays of Eugene O'Neill*, (New York : Oxford University Press, 1988) の pp.151-152 を参考にしていると思われる。"By jimminy"; この言葉は、研究社『新英和大辞典』では、「ああ、おお(軽いものしりを表す)」、小学館『ランダムハウス英和大辞典第2版』では、「(驚き、感動、恐れ等を表す軽い叫び声) ひゃー」と定義されている。
- (13) O'Neill, *Anna Christie*, p.10. このあと、同作品からの引用は、引用文の最後に ( ) 内の数字で示すこととする。
- (14) Jean Chothia, *Forging a Language : A Study of the Plays of Eugene O'Neill*, (Cambridge : Cambridge University Press, 1979), p.37. 幾つかの劇評で、Anna の言葉 ("ugly slang" "the harsh language" p.81) に対し、観客が笑ったことが指摘されている。
- (15) O'Neill, *Chris Christophersen*, pp.46-47.
- (16) Virginia Sapiro, *Women in American Society : An Introduction to Women's Studies*, (Mountain View : Mayfield Publishing Company, 1986, 1990 2nd. Edition), pp.364-366. アメリカ合衆国国勢調査によると、1910年調査で初めて "stenographers and typists" が上位10職種中の第8位に登場、1920年調査では第4位、1930年調査では第3位、1940年2位、1950年以降1位となっている。1970年調査からは "secretaries" として挙げられている。
- (17) エリザベス・ロバーツ、『女は「何処で」働いてきたか』(大森真紀、奥田伸子 訳著) 法律文化社、1990, p.57. 第I部はロバーツの研究書、Elizabeth Roberts, *A woman's Place : An Oral History of Working-class Women 1840-1940*, (Blackwell : Oxford, 1984) の翻訳、第II部は訳者たちの研究の成果から成っている。
- (18) O'Neill, *Chris Christophersen*, pp.94-95.
- (19) Sapiro, pp.364-366. 先に引用した国勢調査結果による女性職の上位10位までの表をみると、1880年から1940年まで "servants" は常に第一位であり続けた。
- (20) ロバーツ, p.50.
- (21) Louis Sheaffer, *O'Neill : Son and Artist*, (New York: AMS Press, 1988, Reprinted from the edition of 1968 by Little, Brown & Company), p.27.
- (22) Gelb, p.126.
- (22) O'Neill, *Chris Christophersn*, p.134.
- (23) Kate Millet, *Sexual Politics*, (New York : Doubleday & Company Inc., 1970) 『性の政治学』藤枝濤子 他 訳、ドメス出版、1985, p.136.
- (24) 『性の政治学』, p.136
- (25) Carl N. Degler, *At Odds : Women and the Family in America from the Revolution to the Present*, (Oxford : Oxford University Press, 1980) , pp.289-295.
- (26) Sheaffer, p.68.
- (27) Bogard, p.163.
- (28) Sheaffer, p.68.
- (29) Bogard, p.155.
- (30) O'Neill, *Letters*, p.159.

### Bibliography

- Bogard, Travis. *Contour in Time : The Plays of Eugene O'Neill*. New York: Oxford University Press, 1972, Revised Edition, 1988.
- Chothia, Jean. *Forging a Language : A Study of the Plays of Eugene O'Neill*. Cambridge : Cambridge University Press, 1979.
- Critical Approaches to O'Neill*. ed. by John H. Stroupe. New York: AMS Press, 1988.
- Degler, Carl N. *At Odds : Women and the*

- Family in America from the Revolution to the Present.* Oxford : Oxford University Press, 1980.
- Eisen, Kurt. *The Inner Strength of Opposites: O'Neill's Novelistic drama and the melodramatic imagination.* Athens : University of Georgia Press, 1994.
- Floyd, Virginia. *The plays of Eugene O'Neill : A New Assessment.* New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1985.
- Gelb, Aurthur and Barbara. *O'Neill.* New York : Harper & Row, 1962.
- Millet, Kate. *Sexual Politics.* New York : Doubleday & Company Inc., 1970. 『性の政治学』藤枝澁子 他 訳、ドメス出版、1985.
- O'Neill, Eugene. *Anna Christie.* Mineola : Dover Publications, Inc., 1998, originally published in 1922.
- .....*Chris Christophersen.* New York : Random House, 1982.
- .....*Selected Letters of Eugene O'Neill.* Ed.
- Travis Bogard and Jackson R. Bryer, New Haven and London : Yale University Press, 1988.
- Sapiro, Virginia. *Women in American Society : An Introduction to Women's Studies.* Mountain View : Mayfield Publishing Company, 1986, 1990 2nd. Edition.
- Sheaffer, Louis. *O'Neill : Son and Artist.* New York: AMS Press, 1988. Reprinted from the edition of 1968 by Little, Brown & Company.
- Wainscott, Ronald Hrold. *Staging O'Neill.* New Haven: Yale University Press, 1988.
- 亀井俊介『ピューリタンの末裔たち——アメリカ文化と性——』研究社出版。1987年。
- 鈴木圭介編『アメリカ経済史Ⅱ 1860年代——1920年代』東京大学出版会。1988年。
- 野村達朗『新書アメリカ合衆国史 2 フロンティアと摩天楼』講談社現代新書。1989年。

(平成12年10月31日受理)